

序論 枕詞と被枕詞の関係

第一節 枕詞の先行研究

枕詞を研究の対象とするばあい、枕詞そのものの定義に関わって、まず直面せざるをえないのは、その認定の問題である。すなわち、ある一つの語句を、枕詞と認定するか否かについては、もとより他の表現形式との差異が明確化される必要が存するからである。ちなみに、修飾句ないし実景表現との異なりとして、枕詞を全体の主意に直接に関与しないものとする規定があるが、實際上、歌の解釈如何によって、往々にして揺れが生ずる。その一例として、

秋風の千江の浦廻の木屑なす心は依りぬ後はしらねど

(卷十一・二七二四)

における「秋風の」が挙げられる。「秋風の」を枕詞とみる主だったものとしては、服部高保『続冠辞考』が、風を「チ」と呼ぶので「千江」の「チ」に続けるといふ一説を紹介し、これに従う鹿持雅澄『萬葉集古義』や、「吹くという語を省きたる格か」と解する福井久藏氏〔増訂〕『枕詞の研究と釈義』などがある。一方で、これに疑問を差し挟み、むしろ、実景と捉える鴻巣盛広氏『萬葉集全釈』の解などが対立し、そうした対立の中間に、近年は、「秋風の吹く、の意で、千江を修飾する枕詞的用法か」(『日本古典文学全集 萬葉集 三』)や、「『吹く』などの述語を省いた枕詞的用法」(『新潮日本古

典集成 萬葉集 三』などのように、「枕詞的用法」という用語が使われるに至っている。

たしかに、右の例のばあい、作者名はもとより作歌状況も知りえず、ために解釈が一定しないという事情も存する。しかるに、作者名ないし作歌状況の記された作にあつても、事柄に変わりはない。例を挙げるならば、

幸_二于紀伊國_一時、川嶋皇子御作歌 或云、山上臣憶良作

白波の浜松が枝の手向けくさ幾代までにか年の経ぬらむ 一云 年は経にけむ (巻一・三四) の「白波の」については、やはり、「白波の打ち寄せる」浜の意と解し、枕詞とは捉えない注釈書(山

田孝雄氏『萬葉集講義』、前掲『萬葉集全釈』など)、枕詞として掲げる福井久蔵氏『枕詞の研究と釈義』や『時代別国語大辞典 上代編』、また「枕詞的用法」と注する『日本古典文学全集 萬葉集』、『新潮日本古典集成 萬葉集 一』の三通りの解釈がみえるといった次第である。「秋風の 千江の浦」「白波の 浜」のいずれにしても、関係は同じであり、結局、これをいかに捉えるかという問題に帰着しよう。

最近の、「枕詞的用法」なる規定は、「秋風の」や「白波の」という連体句を、実質性を欠く裝飾的な修飾と解釈した上でのものと推察される。すなわち、これらの各々の句と、「千江の浦廻の木屑なす」および「浜松が枝の手向けくさ」以下の句との間に必然性はなく、歌の主意に対して、実質的な

限定としては働かないといえる面を重視したのであろう。だが、おそらく、そうした揺れが生ずるところには、枕詞・被枕詞の関係と修飾関係との、語法上の連続性という問題が存するのではないか。そもそも枕詞と序詞についても、両者が区別なしに考えられていた実際は、たとえば、つとに今川了俊『落書露頭』が、「枕ことば」について、

歌の枕言などと云は、たとへば、早と云事をよまんがために、岩きりとをし行水のとよみ、山といはんために、足引といふ。道といはんれうに、玉ぼこといふごとくなる詞を、枕ことばと可心得なり

と解し、「岩きりとをし行水の」までを「枕言」にふくめていることなどから窺える。枕詞と序詞の区別については、くだって、契沖が「序ト云モ枕詞ノ長キヲ云ヘリ」(『萬葉代匠記』精撰本「惣釈枕詞」)と定義し、近現代に至っても、その域を基本的に出ることはなかった。ひとまず、主な見解を掲げておくと、福井久藏氏『新訂増補枕詞の研究と釈義』は、「一句より成るを枕詞とし、それ以上より成るを序詞又は序句と命ずべし」と捉え、境田四郎氏「万葉集の序詞に就いて」(『国語国文の研究』第二二号)もまた、大略これと同じ前提に立っている。こうした形式的な処理に批判的な立場をとった大浜巖比古氏「万葉集序詞私攷」(『天理大学学报』第二卷第一・二号)は、意味・役割・修辭性の観点から論じて、(2)とりわけ右の境田説を論駁したが、結果としては、修辭的な側面からの差異を強調

するにとどまった。

これに対して、土橋寛氏「序詞の概念とその源流」「枕詞の概念と種類」「枕詞の源流」(『古代歌謡論』)の一連の論考は、独自の観点から、枕詞・序詞それぞれの源流を考察し、枕詞と序詞の本質的な差違を明確化した画期的なものであったといえよう。その差異として要約されているのは、次の七点である。

① 使用される場としては、枕詞は歌謡のほかに、かつそれ以前に神託があるが、序詞は歌謡だけに用いられる。

② 使用の目的、ないし機能からいうと、枕詞は神名、地名、及び特定の普通名詞を「修飾」するのに対して、序詞は元来、ある語を修飾するものではなく、「うた」の「発想」形式である。

③ 用いられる素材の性質は、枕詞では場や歌の意味とは無関係に、被修飾語の讃め詞としての性質をもつものであり、序詞は歌の場にある景物、転じては、囑目の景物や一般の景物が用いられる。

④ 被修飾語の性質からいうと、枕詞は体言を修飾し、序詞は用言に「かかる」という形で後句と結合される。

⑤ 被修飾語との結合関係は、枕詞は慣習的・固定的・社会的であるが、序詞は③の性質によつて、当然その場限りで、個人的である。

⑥ 被修飾語との内容的・形式的な接続関係は、兩者類似する点も多いが、枕詞の方が多様性に富んでいる。

⑦ 長さからいうと、②の結果として、枕詞は短歌・長歌にかかわらず、五音一句を占めるのに対して、序詞は短歌では前句―五七調ならば上二句、七五調ならば上三句―にわたり、長歌では第一段を形作る四句以上の長さにわたる。

ことに、枕詞については、固有名詞に冠する枕詞・普通名詞に冠する枕詞・用言に冠する枕詞の三分類を行なった上で、上代の散文資料においては、固有名詞に冠して用いられる枕詞が圧倒的に多く、記紀歌謡においてもそれが半数以上を占めるが、『萬葉集』になると、普通名詞や用言に冠して用いることが多くなるといった、通時的な変遷を明らかにしている。ただし、土橋説は、枕詞の本質を体言の称辞的な修飾と捉える立場から、用言に冠する枕詞について、これを枕詞とみることに疑問を呈し、むしろ序詞に近いものとする判断に立って、「枕詞的序詞」という呼称を与えている。

その後、井手至氏「万葉集文学語の性格」（『萬葉集研究 第四集』）「枕詞―序詞との関連において―」（『国語国文』昭和五二年五月）は、土橋説の、枕詞の起源を神託にもとめるといふ点、さらに

序詞の即境性・^(一三)瞩目性という点を考慮しつつ、序詞と枕詞の性格の違いを、文脈の次元の同一性と異質性の観点から説明しようとした。井手氏は、枕詞の、序詞と相違する著しい特徴を、枕詞の文脈(枕詞及び枕詞の接続部の属する文脈)と主意を表わす語句の属する文脈との異質性に認められる。つまり、本来の姿として、序詞の文脈が作者の位置する時間的・空間的次元と同一次元に属するのに対し、枕詞が、伝承的・固定的な性格を有するため、枕詞の文脈は、

……鯨魚^{いさな}取り 海辺を指して きた津の 荒磯の上に…… (卷三・一三一、柿本人麻呂)

……思ひやる たどきを知らに 肝向^{きんむか}かふ 心摧^{こころ}けて…… (卷九・一七九二、福麻呂歌集)

のように、即時性と即境性をほとんど持たない古文脈に属し、主意の文脈と異次元にあるという。

枕詞を文脈的意味と歌の構造から捉え直した井手氏の観点は、きわめて有効とすべきであり、右の関係をひとまず「異文脈」と呼ぶならば、「異文脈」の概念は、枕詞の、主意との関係に、新しい尺度を与えるはずである。と同時に、語法上連続する、枕詞・被枕詞関係と修飾関係をはじめとして、土橋氏がとくに問題とされる、序詞と、用言に冠する枕詞との関係についても、そのあり方を見なすことが可能になるのではなからうか。以下にそのことを手がかりとして、関係の分類を試みる。

第二節 枕詞・被枕詞の関係分類の試み

枕詞と被枕詞の連接の仕方に着目し、その関係を明確化しようと試みたのは、福井久蔵氏前掲書（第二編第四章 枕詞の性質⁽⁴⁾）、また市村平氏「短歌に見えた枕詞と序詞の研究(一)」「(二)」（『国語と国文学』第七卷六号・七号⁽⁵⁾）であった。両氏の分類を統合し補充した上で、再分類を試みた土橋寛氏前掲「枕詞の概念と種類」に拠れば、大要は、

(A) 正義的關係 属性的枕詞（神風の―伊勢、ちはやぶる―神）

類語・縁語的枕詞（八雲立つ―出雲）

比喩的・主述的枕詞（若草の―妻）

(B) 転義的關係―懸詞的枕詞

(イ) 属性を表わすもの（真髪振る―奇稲田姫）

(ロ) 類語・縁語的關係のもの（飛鳥の―明日香）

(ハ) 比喩的・主述的關係のもの（栲衾―新羅）

(C) 同音反復的枕詞（まそがよ―蘇我の子）

(D) 代用枕詞（あしひきの―岩根）

(E) 転用枕詞(百足らず―筏)

(F) 連鎖的枕詞(山川の 清き河内と 御心を―吉野の国の)

という次第になる。さらに、これを、詳細に検討した金子武雄氏『称詞・枕詞・序詞の研究』(第二編第一章 枕詞と枕主詞との関係―成立の機縁)は、土橋氏の(D)(F)を分類基準の異なるものとして処理し、(A)を「意味関係」、(C)を「音声関係」、(B)(E)を「意味・音声関係」として一括した。金子説は、土橋氏の論考にわずかに先立つ境田四郎氏「枕詞と序詞」(『萬葉集大成』六)の示した、「意義に関するもの」「音に関するもの」の二分類を受け継ぎ、その両面の形態を有する例にとくに着目したものとええよう。この後の井手至氏前掲「万葉集文学語の性格」の分類も、基本的には、「反復する形式」「掛け詞」の形式を軸として、「意味」と「音」の二項を組み込み、さらに「意味的関連性によって接続するもの」を別に扱ったものであり、次のごとく示されている。

(一) 反復する形式の類同性によって接続するもの

(イ) 形式の類同性のみによるもの(真菅よし―宗我)

(ロ) 意味の類同性にもよるもの(真玉手の―玉手)

(二) 掛け詞との意味的関連性によって接続するもの

(イ) 同形異義語の掛け詞との意味的関連性によるもの(味酒を―三輪)

(ロ) 多義語の掛け詞との意味的関連性によるもの(荻薦の―乱る)

(ハ) 意味的関連性によって連接するもの(家つ鳥―鶏、ちはやぶる―神)

しかし、駒木敏氏「序詞・枕詞」(『国文学』昭和六十年十一月号)「枕詞―その始原性から和歌的修辞法への位相―」(『論集 和歌とレトリック』)が疑問として示すように、「音韻的契機によるものが意味的連関をもたないわけではなく、枕詞と被枕詞の連接の契機を「意味(意義)的契機」「音韻的契機」の二つに大別するのみで、果たして事足りるであろうか。そこに導入すべきは、むしろ、本来的に「意味」と「音」の両面を備えたものとしての枕詞・被枕詞関係の捉え方であり、その点でも、前節で着目した「異文脈」という観点は、有効となるに違いない。

けだし、「異文脈」とは、枕詞が、主意と本来的に異なる文脈を背後に負うことであろう。たとえば、

二もりく
隠国の 泊瀬の国に さよばひに 我が来れば たな曇り 雪はふり来 さ曇り 雨は降り来
野つ鳥 雉は響む 家つ鳥 鶏もなく さ夜は明け この夜は明けぬ 入りてかつ寝む この
戸開かせ
(巻十三・三三三一〇)

の、「野つ鳥―雉」「家つ鳥―鶏」における「雉」「鶏」は、それぞれ「野つ鳥」「家つ鳥」の下位概念を代表するものとしてあり、そのつながりは意味的な推論に基づく。しかも、その関係は、「雉」「鶏」

が文の主語であることに、限定的に関与するわけではない。つまり、「野つ鳥―雉」としたばあいと、単に「雉」としたばあいに、主語としての意味、文法資格の差はない。ただし、前者は、その背後にある「周縁的意味」(井手氏前掲論文)を負っていよう。極言すれば、「雉」が「野つ鳥」に含まれることの古い伝承に属する意味である。もとより、それは確たるものではなく、また溯及しうることでもない。とはいえ、そうした古いつながりの情調は、ここに漂っているのではないか。あえて推測するならば、「雉」は、人里近い草原や熊笹、竹藪などに群れをなして住む留鳥であり、その鳴き声も鋭く、野の鳥を代表するものであるということに加えて、「朝猟に 鹿猪踏み起し 夕猟に 鶉雉履み立て」(卷三・四七八、家持)などと詠まれるごとく、鶉と並び、鶉鳥として主要な鳥であったといわれる、そのことによるのかもしれない。「家つ鳥―鶉」の「鶉」についても、はやくから家禽となり、曉を告げる鶉鳴が魔を払う声として喜ばれたとも考えられる。さらに、

味酒 三輪の山 青丹よし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隅 い積もるまでに
つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見さけむ山を 情なく 雲の隠さふべしや

(卷一・一七、額田王)

における、「味酒―三輪」のごとき例も、「三輪」は、地名として提示されているが、その「みわ」は、本来、「御庭(酒を供える器)」であつて、崇神王朝の衰亡した五世紀以後に、三輪山の神の祭祀に携

わった三輪氏の本宗が、須恵器の生産と流通に関わるといふ(吉井巖氏『天皇の系譜と神話』二七 崇神王朝の始祖伝承とその変遷)、そうした由緒のようなものの応用とみなしえよう。上掲の「名詞―(固有)名詞」の形態をとる例に、文脈の異質性は、顕著にみてとれる。その枕詞・被枕詞関係に明らか認められるのは、関係の意味的な契機である。伝承の文脈は、多分に潜在していようが、意味が関係を構成するとひとまずはいえる。

しかし、實際上、意味によつてのみ関係を構成するといえる例は少ない。「味酒―御^み_わ」のばあい、意味において両者は関係するが、それが直ちに同音「ミワ」によつて地名「三輪」に結びつく。そこにあるのは、主として音の契機である。音の契機は、

……言^{こと}幸^{さち}く ま幸^{さち}く座^ませと つつみ無^なく 幸^{さち}く座^まさば 荒磯^{あらいそ}波^{なみ} ありても見^みむと 百重^{ももぢ}波^{なみ} 千重^{ちぢ}波^{なみ}に敷^しき 言^{こと}挙げ^あげす我^{われ}は

(卷十三・三二五三、人麻呂歌集)

の、「ありそなみ―あり」や、

……ははそ葉^はの 母^{はは}の命^{いのち}は み裳^みの裾^{すそ} 摘^とみ上げ搔^かき撫^なで ちちの実^みの 父^{ちち}の命^{いのち}は たくづのの 白^{しろ}髭^{ひげ}の上^{うへ}ゆ 涙^{なみだ}垂^たり 嘆^{なげ}きのたばく……

(卷二十・四四〇八、家持)

にみえる、「ははそばの―母」「ちちのみの―父」を端的な例として、同音が、両者をつなぐところにみられ、そこでの意味関係は、実質的には排除される。一方、「味酒―御^み_わ」は、隣接的な相互の意

味関係を有しており、「野つ鳥―雉」などの例に並ぶといえる。だが、「味酒―三輪」の中から、「(味酒) 御^み^ち 珥^わ || ミワ || 三輪」という同音関係を析出するならば、それは、「ははそばの―母」に等しいことになる。

これらふたつの契機は、なるほど、従来の諸研究の指摘するごとく対立的ではあるが、実は、ひとつの枕詞・被枕詞の関係の中で、右のように接しあい、また表裏することになる。たとえば、「野つ鳥―雉」といった、あくまでも意味を主とする関係にあつて、音の契機は、なおその背後に潜む要素として存するのではなからうか。⁽¹⁰⁾ かたや、「ははそばの―母」の音的關係にあつても、「ははそばの」の「ハハ」は、結果的に「母」を意味するように置かれている。意味の契機が、関係の実質を論理的に担うのに対して、音の契機は、論理よりもむしろ即境的あるいは情調的といえるかもしれない。その中で、

……娘子らが さ寝す板戸を 押し開き い^{たど}通り寄りて ま玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜の
いくだもあらねば……
(巻五・八〇四、憶良)

と詠まれた例の、「ま玉手の―玉手」などは、両者が顕在している例であろう。⁽¹¹⁾

枕詞と被枕詞の関係の契機について、意味と音が表裏的に存在することを述べてきたが、いつたいに枕詞と被枕詞は、それぞれが何らかの意味をもつゆえに、枕詞の意味は、それがすでに失われてい

た例もあるにせよ、両者の関係が、意味関係を基本とするものであったことは、当然考えられる。つまり、その関係は、意味相互の有縁性に基づく。この有縁性ということは、意味の契機において、先述の異文脈ということと、密接な相関性をもつと認められよう。その異質性を、仮に度合いとして捉えるならば、そこでは、異なり具合を文脈の遠さ・近さとして位置付けることができる。近さは、有縁性の濃さの顕在として示され、序詞や形容句への接近を意味しよう。反面、「ははそばの―母」のように、同音を繰り返すことによつて連接する例が、文脈の上で一層遠ざかることは、論を俟たない。そこでの有縁性は極度に薄く、意味的にはほとんど無縁といえる。試みに、このことを図（1）（後掲）のように示しておく。

枕詞と被枕詞の意味的な有縁性の濃い例は、意味的關係を顕在的な契機とすると捉えることが穩当であろう。意味的關係のものとしては、体言を被枕詞として連体關係をもつばあいと、用言を被枕詞として連用關係となるばあいがある。しかし、被枕詞が体言であっても接続の仕方において、

あづさゆみ引津野辺なるなのりその花採むまでにあはざらめやものりその花

（卷七・一二七九、人麻呂歌集）

あづさゆみ春山はる近く家居らばつぎて聞くらむ鶯の聲

（卷十・一八二九）

などにおける、「あづさゆみ―引津」「あづさゆみ―春」のように、「引く」「張る」の用言が、体言の

被枕詞に隠されてあるばあいも、枕詞・被枕詞の関係の分類においては、広義に連用関係とみなして扱おうるとしてよい。また連体関係・連用関係のいずれであっても、たとえば、

……玉藻なす 靡き寝し児を 深海松の 深めて思へど さ寝し夜は いくだもあらず……

(卷二・一三五、人麻呂)

……明星の あくる明日は しきたへの 床の辺去らず 立てれども 居れども ともに戯れ

夕星の 夕へになれば いざ寝よと 手を携はり…… (卷五・九〇四、憶良か)

のように、「深海松の―深めて」「夕星の―夕へ」などは、意味的關係にありながら、音的な要素を付随させている。それはまさしく、前述のような、ふたつの契機の表裏的な交渉の一環である。

この観点に立って、まず連体關係の形態のものについて、少しく考えておきたい。連体關係による枕詞と被枕詞の關係のありかたは、連用關係に比して多様だと認めうる。たとえば、

……蜻蛉島 大和の国に 雁卵産と 汝は聞かすや (紀歌謡六一二)

における「蜻蛉島―大和」の例を取り上げてみよう。『古事記』に、孝安天皇の宮所として「葛城の室の秋津嶋の宮」がみえ、これによって、「蜻蛉島」は、元來、奈良盆地西南部の一地名であったことが知られる。つまり、枕詞の「蜻蛉島」が、被枕詞の「大和」に包含される關係である。しかし、同じく『古事記』の雄略天皇の条には、「阿岐豆野」遊獵に際して歌われた、

…手こむらに 虻かきつき その虻を 蜻蛉はや食ひ かくのごと 名に負はむと そらみつ
大和の国を 蜻蛉島とふ (記歌謡九七)

の例があり、「大和の国」と「蜻蛉島」が対等の名称に成りえていることに留意しなくてはならない。従って、直木孝次郎氏「やまと」の範囲について―奈良盆地の一部としての―(『飛鳥奈良時代の研究』の論で明らかにされた、「大和」を示す範囲の拡充する実⁽¹²⁾が窺えるものの、「蜻蛉島」は「大和」の言い換えとして等価であると考えられる。

このことは、「草枕」と「旅」との関係にも当てはめることができよう。「草枕」は、旅中での仮寝に付属する「モノ」のひとつとしてあつたと推測される。ちなみに、聖徳太子の歌として伝えられる、家ならば妹が手まかむ草枕旅に臥やせるこの旅人あはれ(卷三・四一五)

では、「妹が手(手枕)」と「草枕」との対比が、端的かつ意識的に示されている。家との対比において捉えられる旅中であつて、「草枕」は、『時代別国語大辞典 上代編』に、「実際にそのような枕を用いたというよりも、旅のわびしさを示すための表現である」と指摘する。たしかに「草枕」は、「旅」に属して、野宿をさす「モノ」であることから、ひいてはその困難さ、わびしさという「旅」の主要な属性を示している。

逆に、たとえば、

石上^{いすのかみ} 布留を過ぎて 薦枕 高橋過ぎ 物さはに 大宅過ぎ 春日^{はるひ}の 春日^{かすが}を過ぎ……

(紀歌謡九四)

における、「石上―布留」は、大地名とそこに含まれる小地名の関係であつて、「野つ鳥―雉」「家つ鳥―鶏」と同じく、図式の上で枕詞が被枕詞を包含する関係にある。しかし、「布留」が、石上神宮の置かれた地としてよく知られた地名であり、また、「雉」「鶏」が、より親しみのある、生活に密着したものであるならば、「石上」といえば「布留」、また「家つ鳥」といえば「鶏」のように、その中から取り出されてしかるべきものであつたと把握することに、不都合はないだろう。すなわち、下位概念のひとつであつて、しかもそれを代表すると解される。

一方、前述のように、「ははそばの―母」「ありそなみ―あり」などでは、意味よりも音相互の関わりを主としており、意味的な有縁性は薄いと捉えられよう。ただし、音を主たる契機に据えている関係であつても、

菅^{すが}の根^ねのねもころ君が結びたる我が紐の緒を解く人はあらし (巻十一・二四七三、人麻呂歌集)

さ百合^{ゆり}花^{はな}後も逢^あはむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ (巻十八・四〇八八、家持)

などと詠まれる、「すがのねの―ねもころ」や「さゆりばな―ゆり」は、「ネ」ないし「ユリ」の音的な同一性にとどまらず、「すがの根」と「根」、また「さゆりばな」と「ゆり」の花といった類的な意

味関係を有する点で、「ありそなみ―あり」などの例とはいささか異なる。さらに、

……吾が恋ふる 心の中を 人に言ふ ものにしあらねば 松が根の 待つこと遠み 天つたふ
日の暮れぬれば 白たへの 吾が衣袖も 通りて濡れぬ
(卷十三・三二五八)

後瀬山のしせやまのし後も逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日までも生けれ(卷四・七三九、家持)

の、「松が根の―待つ」「後瀬山―後」においては、「松が根の」「後瀬山」の枕詞のなかに、通常は持ち得ない「待つ」「後」の意味が、被枕詞によつて喚起せしめられている例とみなすことができるのではなからうか。このことは、先の、意味についてみたふたつの契機の交渉を、音の側からたどるものといえる。

次に連用関係の形態のばあいだが、総じて、枕詞と被枕詞の有縁性は濃く、また文脈的には近く、連接の仕方も密接である。

草枕旅にし居ればかりこも菫の乱れて妹に恋ひぬ日はなし
(卷十二・三一七六)

において、連接語「乱る」は、被枕詞と一致する。すなわち、「菫」に対しても作者の心にとつても述語として働く。なおかつ、恋の思いに乱れる心を「菫」のさまとしてなぞらえ、あるいは受け止めて表現したのであろう。とすれば、

み吉野の蜻蛉の小野に菫る草の念ひ乱れて寝る夜しぞ多き
(卷十二・三〇六五)

の、「み吉野の蜻蛉の小野に苺る草の―念ひ乱れて」という序詞のばあいの関係と、同じ意識と見做されかねない。すなわち、枕詞の認定の問題と絡んでくることになる。ために土橋氏は、このような例を、先掲のごとく枕詞とみず、「枕詞的序詞」とされたのであろう。

連用関係は、右のように、常に顕在的な例のみではない。すでに触れたように、体言の被枕詞の中に隠されるばあいも存在する。その例としては、「あづさゆみ―引津」をはじめとして、

まそかがみ敏馬みぬまの浦は百船ひやくぶねの過ぎて行くべき浜なみならなくに
(巻六・一〇六六、福麻呂歌集)

における「まそかがみ―敏馬」など、二文が懸詞でつながる例があげられる。各々「あづさゆみ(を)引く」「まそかがみ(を)見る」という意の枕詞の文脈に比して、「引津」「敏馬」といった被枕詞は、地名として自立し、その中では、「引く」「見る」の意味は表面には現れない。だとしても、連用関係は、潜在しているわけであり、それが顕在しているばあいも、同様に枕詞と認定して支障はないのではなからうか。ちなみに、先の例に即していえば、「苺薦あまのいの乱れて」の方は、確かに、「草枕くさまくら旅にし居れば」という条件のもとで詠み込まれているゆえ、序詞的要素の強い印象を与えるが、「苺薦の」について、

吾が聞きにかけてな言ひそ苺薦あまのいの乱れて思ふ君がただかぞ
(巻四・六九七、大伴像見)

といった、歌の主意から切り離された端的な例があることからも窺えるように、やはり、枕詞として

意識されていたであろう。その点で「み吉野の蜻蛉の小野に荻る草の念ひ乱れて」という序詞とは、一線を画さざるをえないことになる。

とすれば、総じて、連体関係・連用関係を通して、「草枕―旅」「荻薦の―乱る」のような、顕在的な関係を、直接・一次的ということが可能であり、「たまくしげ―二上山」（卷十七・三九八七、家持）「あづさゆみ―引津」のように、懸詞でつながり、各々、「蓋」「引く」が隠れる関係は、間接・二次的と見做しえよう。広義に連体関係・連用関係の区分を図示してみると、図（2）（後掲）のようになると考えられる。

以上の吟味を容れて、総体的に捉えるならば、意味と音のふたつの契機は表裏するが、前述のように、繰り返しの形のものにあつては、ふたつがともに顕在的である。そのあり方から、枕詞・被枕詞の関係の全体をみることができる。すなわち、前掲「蜻蛉島―大和」「野つ鳥―雉」などの枕詞と被枕詞は、事実上の包含関係を越えて質的に等価であるものないし事柄が、言い換えられると把握しうる。その言い換えというあり方は、質的に同じものを繰り返すという意味で、繰り返しの形式と基本的に同じい。音のみによる繰り返しが「ははそばの―母」「ありそなみ―あり」などであり、同音かつ同義、つまり全く同じものの繰り返しが「ま玉手の―玉手」などである。

また、「ぬばたまの―夜」「わかくさの―妻」など、一般に譬喩的枕詞とされる例においては、たと

えば前者のばあい、「ぬばたま」と「夜」の双方に内在する質・属性が、黒（暗さ）として等しく、後者では、「若草」と「妻（夫）」の若々しさ、瑞々しさという属性によって結び付くといえよう。「神風の―伊勢」「あをによし―奈良」や、さらに「ちはやぶる―神」「あかねさす―日」なども、被枕詞から抽出される属性を枕詞としている。

ならば、枕詞・被枕詞関係のあり方は、広い意味で言い換えと規定しえようが、そのなかで、「たまくしげ―二上山」、あるいは、

妻隠る 矢野の神山 露霜に にほひそめたり 散らまく惜しみ（卷十・二一七八、人麻呂歌集）の例における「つまごもる―矢野」などは、言い換えられるもの、すなわち「蓋」「屋」が隠されてあるばあいとして位置付けられる。被枕詞のことばのうち隠されてあるものを、ことばの中から取り出す、ともすれば枕詞によってそうあるように至らしめるという点で、先にも触れたように、被枕詞が枕詞の意味に直接関わるものに比して、このたぐいの例は二次的である。

枕詞と被枕詞の関係は、何よりも懸詞の位置付けが、枕詞と被枕詞の意味関係のあり方を、捉え所のないものにしていたといえよう。しかし、それらを等質に把握しうる叙上の観点を導入することによって、上代における枕詞の通時的な展開が明らかになるはずである。

(1) 澤瀉久孝氏『萬葉集注釈』は、「白波の」について、『鶯の春』(一〇・一八四五)、『かぎろひの春』(六・一〇四七)などのやうに、述語を省略した枕詞風な用語である」とし、「秋風の」については、『白浪の』(二・三四)の類の枕詞と見てよい」とする。「白波の」は「秋風の」千江の浦の例をはじめ、「鶯の」春「かぎろひの」春などを、述語を省略した形であるとしたばあい、これらを、修飾・被修飾の関係とみるか、枕詞・被枕詞の関係とみるか、微妙な問題の存することを示している。

(2) 大浜巖比古氏は、枕詞と序詞との差異を、次のように図式化されている。

枕 詞

序 詞

- | | | |
|---|--------------|-----------------|
| 1 | 意味判明セズ乃至ハ無意味 | 独立シテ有意味―具象性・文章性 |
| 2 | テアル―抽象性・単語性 | 発想性 |
| 3 | 整調性 | 即興性・個性性 |
| 4 | 作為性・慣習性 | 表現的修辭性 |
| | 純粹修辭性 | |

5 意味ノ單純化ニ役立ツ

單純ナル感情表出ノ強調効果ニ役立ツ

(3) 土橋寛氏は、『古代歌謡論』において、歌の場ないし環境に即した景物を、「即境的景物」と捉え、また、歌の場に依存してその場の景物を詠み込むという発想法を、「即境的発想法」とされた。ここで示された、とりわけ場に即するという特性をさす語として、「即境性」を用いる。

(4) 内容をまとめて示すと、次のごとくである。

觀念の連合及伴生

類似の關繫に基づくもの（根白の―白き腕）

區別の目的によるもの（葦が散る―難波）

部屬の關繫によるもの（庭つ鳥―鶏、野つ鳥―雉）

事物の緣由によるもの（味酒―三輪）

思想の轉換

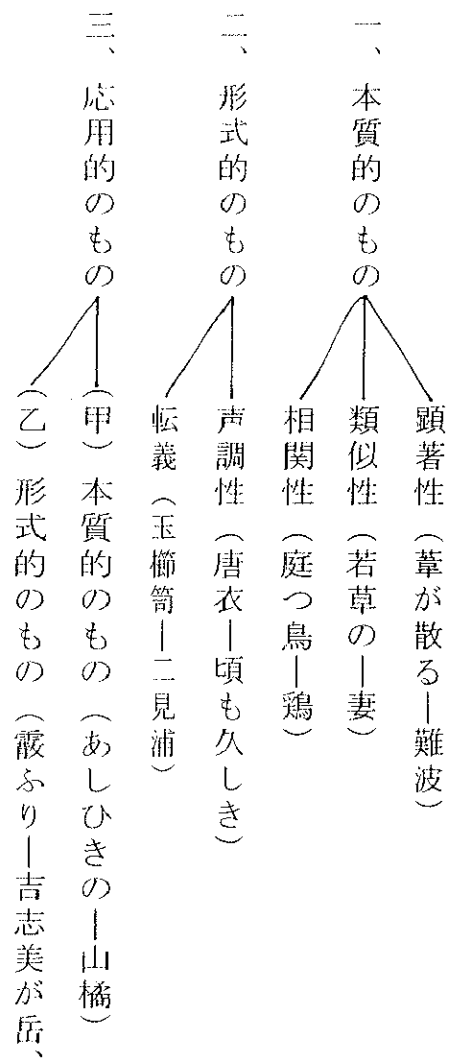
類似の關繫に基づくもの（ぬばたまの―黒髮山）

區別の目的によるもの（玉櫛笥―二見浦）

部屬の關繫によるもの（水鳥の―鴨の氏人）

同音反復

(5) 市村氏は、次のように分類されている。



秋風の―千江の浦廻

(6) 境田氏は、「意義に関するもの」と「音に関するもの」に分け、さらに次のごとく下位分類を
 されている。

一、意義に関するもの………譬喩 (朝露の―消易き命)、形容 (草枕―旅)、

説明 (野つ鳥―雉) 等

二、音に関するもの………掛詞 (かき数ふ―二上山)

同音繰返 (真菅よし―蘇我の子)

(7) 井手至氏「万葉集文学語の性格」が、

枕詞を用いた、たとえば「足曳きの山」という表現と、単なる「山」という表現を比べてみると、中核的意味に差はないが、周縁的意味は前者に厚みを感じる。つまり、枕詞は連接語の表わす主意に微妙なニュアンスを付加し、整調性ととともに、受容者に複雑なイメージを想起させるものである。

という、その「周縁的意味」である。

(8) 東光治氏『続萬葉動物考』(十六、雉考)。

(9) 同右『萬葉動物考』(十四、鶏鳴と短歌)。

(10) 試みに、背後に潜む音の契機を分析すれば、「野つ鳥トリ——(狐の対象となる主要なトリとしての)雉キギシ」あるいは「野つ鳥(キギシと鳴く声の狐鳥)——雉」といえるようか。後者の「キギシ」の音については、狩谷掖齋『箋注倭名類聚抄』(巻七)が、「云 岐岐須者岐岐之之転、岐之者岐岐之之急呼耳、皆以鳴声為名」と注し、「雉」の名は、その雉の鳴き声に由来するとしており、参考になろう。また、土橋寛氏『古代歌謡全注釈 古事記編』は、「庭つ鳥 鶏」(記歌謡二)について、神楽歌に、

鶏は かけろと鳴きぬなり 起きよ起きよ 我が門に 夜の夫 人もこそ見れ(八八)

とあることをもって、「鶏」という名称が鳴き声に基づくものとする。これらの語源の解釈が

妥当ならば、「野つ鳥―雉」「家つ鳥―鶏」の音的關係は、より明確になるといえよう。

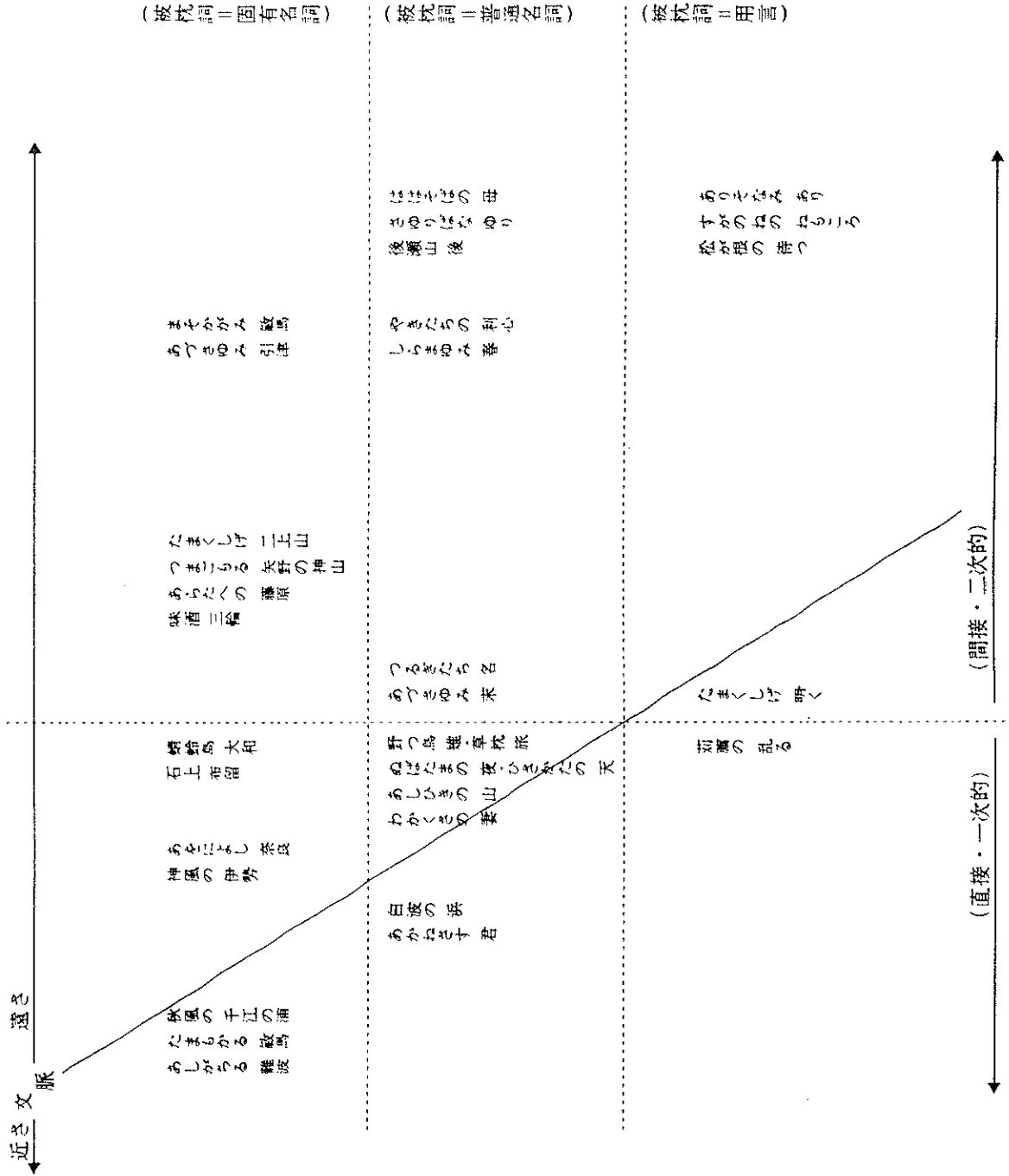
(11) これに類する例としては、「ま蘇我よ―蘇我」(紀歌謡一〇三)の例が挙げられる。『萬葉集』の、「ま菅よし宗我の河原に鳴く千鳥」(卷十二・三〇八七)から推して、「ま蘇我よ―蘇我」の「蘇我」は、「菅」の意で同音を繰り返したとする見方(賀茂真淵『冠辞考』など)があるが、逆に、「ま蘇我よ―蘇我」の固定化の上に立って、転用したのが『萬葉集』の用例であるとも考えられよう。

(12) 直木氏の所説に拠れば、「大和」の範囲は、

- a 磯城・十市両郡を中心とする地域
- b 奈良盆地全域
- c 国名としての奈良県全体
- d 日本全体

のいずれかであり、天皇を中心とする朝廷の発展と並行して、aからdの方向へ向かって広がっていったとされる。

図 (1)



図(2)

